

# 和服着装に関する研究 (第1報)

—— 浴衣と帯の利用について ——

豊田幸子・山本寿子

## A Study on the Dressing of Japanese Style Clothes ( I )

— Use of *Yukata* and *Obi* —

Sachiko TOYODA Hisako YAMAMOTO

### 緒 言

和服は私達の生活の中で長い間親しまれ、豊かな衣生活と伝統文化の発展にたずさわってきた。しかし、現代の衣生活において、和服の着装は日常着から儀式や趣味的な着用へと変化している。このような流れの中で、伝統衣裳として、現代生活に適した和服の着装形態について考察し、教育に生かしていきたいと考える。

今若年層においては、成人式や卒業式のファッションとしての和服がみられるなかで、3年続きの“浴衣ブーム”も定着されつつあるといわれる。日本衣料管理協会<sup>1)</sup>や日本きもの教育センターの発表<sup>2)</sup>によると、女子高校生では79%、大学生では47.7%が浴衣での外出体験を持っている。呉服業界においても、気軽に購入し着用できる和服として、浴衣のプレタ化<sup>3)</sup>や付け帯の帯結びの工夫等もみられる現状である。

そこで本報では、女子大生の浴衣と帯の着装及び調製の方法、さらに和服の着装を簡便にする付け帯についてアンケート調査を行い、実態を明らかにすることが出来たので報告する。

### 方 法

調査対象は表1に示すように、名古屋女子大学短期大学部の学生750名である。Aの検討グループとして服装学専攻250名、食生活専攻と栄養科250名、生活文化専攻250名を検討、さらに専攻、コースの特色を比較するためにBの検討グループとして服装文化コース160名、食生活専攻190名、情報秘書コース187名を比較検討した。なお服装文化コースは平面構成の授業を有し、浴衣を全員が縫製するという専門的なコースである。食生活専攻は教職課程を選択する学生を含めて約25%が被服構成実習を履修している。情報秘書コースでは被服関係の実習はない。

調査内容は、浴衣の着用回数と調製方法、帯の種類とし、付け帯についてはその構成と価格を調べた。

調査時期は1992年9月~10月である。アンケートは質問紙法による集合調査法で行った。

### 結果及び考察

#### 1. 浴衣の着用状況

1992年夏の浴衣の着用状況を図1に示す。750名の全体では浴衣を着用しなかった学生が

表1 調査対象人数一覧

学校名	学科名	専攻名	コース名	人数
名古屋女子大学 短期大学部 (750名)	生活学科 (690名)	服装学専攻 (250名)	服装文化コース (160名) 服装デザインコース (90名)	250名
		生活文化専攻 (250名)	情報秘書コース (187名) 国際文化コース (45名) 生活造形コース (18名)	250名
		食生活専攻 (190名)		250名
	栄養科 (60名)			

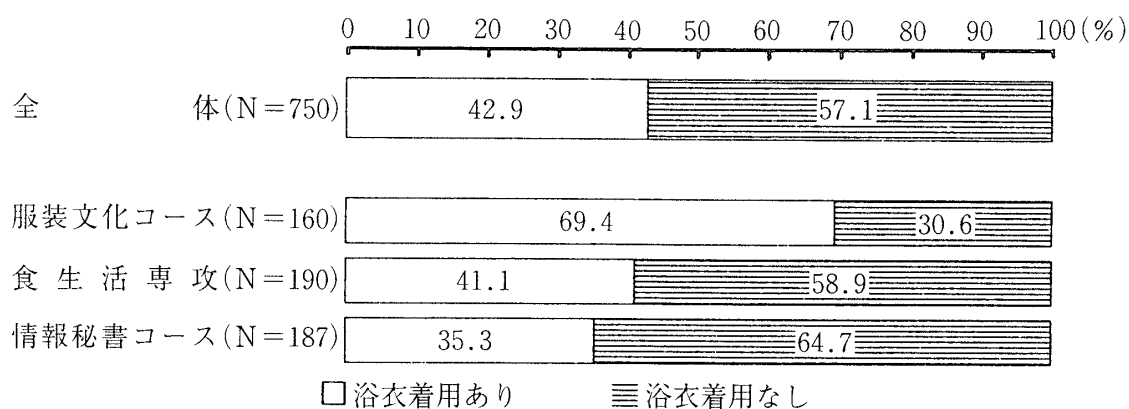


図1 浴衣の着用状況

57.1%あるのに対して、浴衣を着用した学生は42.9%と4割をこえて半数に近かった。日本衣料管理協会発表<sup>1)</sup>による全国50の大学の学生1795名による“「ゆかた」の着用の有無”と比較してみると“着た”が47.7%，“着ない”が52.2%であり、本学の学生とは約5%の差で、ほぼ同傾向であった。しかし、学生の所属専攻及びコース別に特色がみられるように服装学専攻から服装文化コース160名、食生活専攻190名、生活文化専攻から情報秘書コース187名をそれぞれ集計して比較してみると、服装文化コースは着用ありが69.4%と高率を示し、次いで食生活専攻41.1%、情報秘書コース35.3%の順であった。服装文化コースでは着用ありの69.4%は着用なしの30.6%の約2.3倍を示すが、食生活専攻や情報秘書コースではその逆になり、着用なしが58.9%、64.7%と多くみられた。服装文化コースは平面構成の授業があり、食生活専攻も中学校教諭2種免許状の家庭取得を目指す学生は被服構成実習の授業を選択することもあり、情報秘書コースより浴衣着用の関心度が多いように思われる。

浴衣の着用回数を図2に示す。調査対象750名の全体では浴衣の着用者は322名であった。322名の着用者について着用回数を調査した結果、1回だけ着用した学生が最も多く64%、2回が25.5%で、3回が6.2%、4回が2.8%、5回以上も1.5%みられた。着用者のうち89.5%と約9割の人は1～2回着用したという結果であり、ひと夏で3回以上着用し、夏のきもの

ファッションを楽しんでいる学生も10.5%いた。日本衣料管理協会発表の資料<sup>1)</sup>では、浴衣の着用者856名の着用回数1回が47.3%，2～3回が42.9%，4回以上が9.4%であり，2～3回の着用者の42.9%と1回の着用者47.3%との差があまりなく，本学の学生より着用回数が多い傾向がみられる。これは調査対象者が，衣料管理士課程を学ぶ周辺の学生であるために浴衣の着装にも関心があるためと思われる。さらに，コースに特徴がみられる服装文化コース，食生活専攻，情報秘書コースの浴衣の着用者255名の着用回数をみると1回が61.6%，2回が27%，3回が6.6%，4回が2.8%，5回以上が2%であった。着用回数を専攻・コース別にみると，全専攻・コースとも1～2回が88.6%であり，3回以上は11.4%と全体の322名の10.5%より多い傾向である。さらにひと夏で3回以上着用したという傾向は服装文化コース，食生活専攻，情報秘書コースの順に4.3%，4.7%，2.4%となり，服装文化コースと食生活専攻は同傾向を示している。しかし1～2回の着用者は39.2%，25.9%，23.5%であり，服装文化コースは食生活専攻や情報秘書コースより15%前後多いという結果であった。

## 2. 浴衣の調製方法

着用した浴衣の調製方法について，“手縫い”と“既製品”のいずれかを質問した結果を図3に示す。Aグループ全体の322名では手縫いが78.6%，既製品が19.2%，手縫いと既製品の両方の浴衣を着用したのが2.2%みられた。さらにBグループの専攻・コース別にみると，いずれの専攻でも手縫いの浴衣の割合が大きい値を示しているが，教材として浴衣の製作を行っている服装文化コースが40.4%と高率を示している。ついで食生活専攻が23.1%，情報秘書コースが14.9%の順である。既製品の浴衣では逆に情報秘書コースが10.6%，食生活専攻が7.4%の順で，服装文化コースは1.2%と少ない。日本衣料管理協会発表の資料<sup>1)</sup>では，“仕立て上がり”の既製品の利用が610名中42.8%あり，名古屋女子大学ではA，Bグループいずれの場合も19.2%と少ない。これは本学の調査対象人数が約半数であり，その中に服装学専攻の学生が約1/3含まれるので，既製品利用は低率であったが，Bのグループの既製品利用者のうち授業の中で浴衣を製作する服装文化を除き，浴衣の製作と関係のない食生活専攻と情報秘書コースをあわせて整理すると32.4%になり，日本衣料管理協会の42.8%よりやや低率を示したこの事から一般には3から4割の人達が既製品を購入していることがうかがえる。それに比べて服装文化コースは93%とほぼ全員に近い学生が自分で製作した浴衣を着用し，既製品は2枚以上所持する学生に限られると思われる。

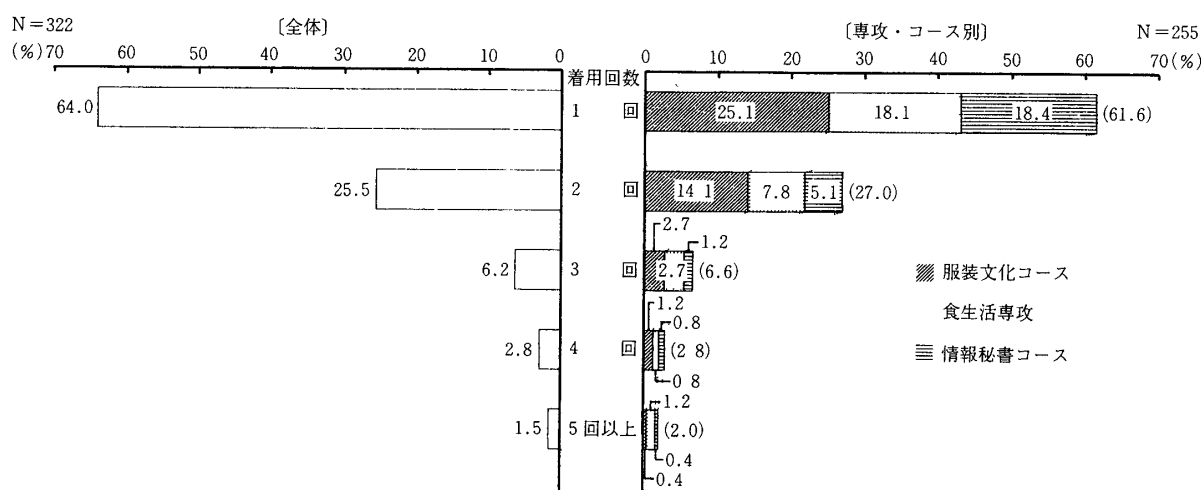


図2 浴衣の着用回数

手縫いの浴衣における縫製者について図4に示す。Aの全体では手縫いの浴衣の利用は253名であり、本人の縫製が43.2%と最も多く、次いで呉服屋にたのんだ場合が24.8%、家族の人に縫ってもらったのが20.7%、その他としてのおばや知人にたのんだが11.3%であった。同様にBグループの服装文化コース、食生活専攻、情報秘書コースの手縫いの浴衣利用者200名の縫製者をみると、服装文化コースでは本人が50.5%と高率を示し、食生活専攻では呉服屋が11.9%、その他7.1%、家族6.7%、本人も2.4%みられた。情報秘書コースは家族7.6%、呉服屋7.1%、その他3.8%の順にみられ、自分で縫う人はなかった。

3. 帯の種類

帯に関する集計については服装文化コースも他のコースの学生も帯の縫製経験はなく、そのためBグループの比較をする必要はないので、Aグループの全体について述べる。

浴衣の着用時に用いる帯の種類についての調査結果を図5に示す。浴衣を着用した322名全体で検討すると、自分で結ぶ半幅帯が78.6%と多く、簡便に着装できる付け帯を利用した学生は18%であった。専攻別にみると、半幅帯の利用では服装学専攻38.2%、食生活専攻及び栄

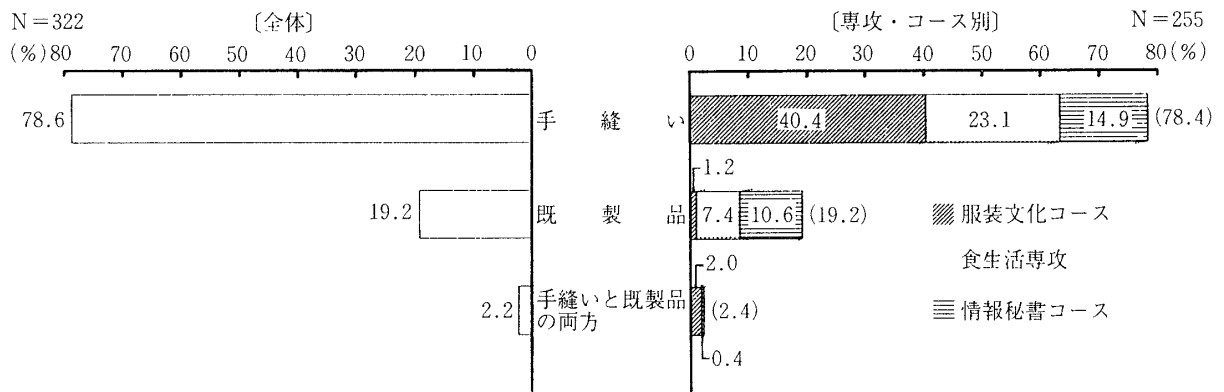


図3 浴衣の調製方法

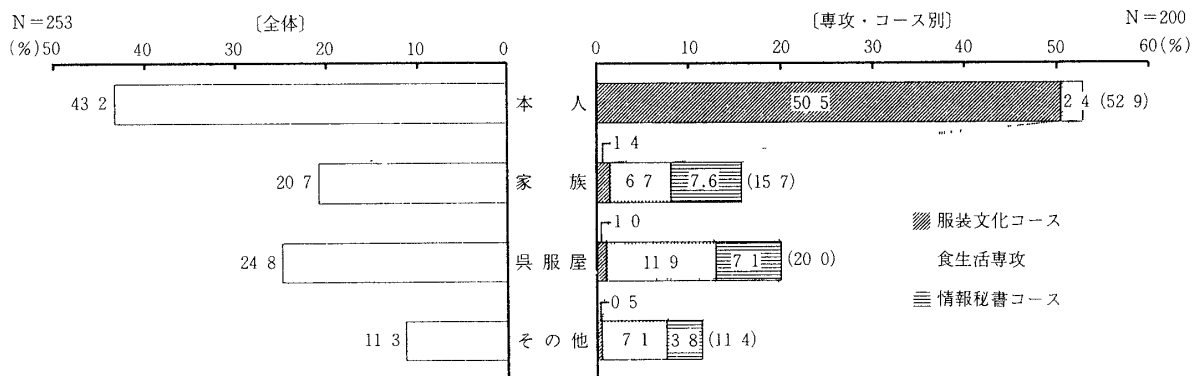


図4 手縫いの浴衣における縫製者

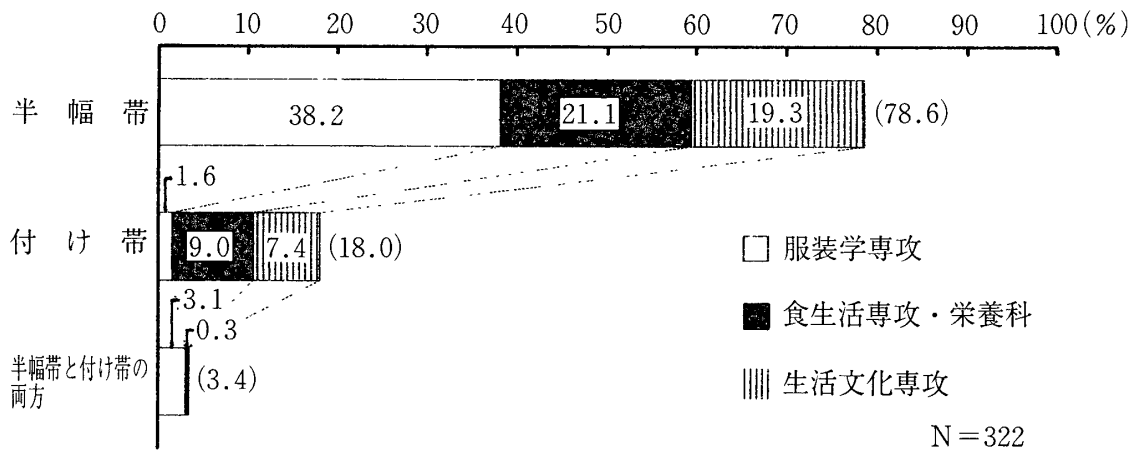


図5 帯の種類

養科21.1%，生活文化専攻19.3%であり服装学専攻は他の専攻に比べ2倍近い値を示した。付け帯では食生活専攻及び栄養科が9%，生活文化専攻は7.4%と服装学専攻の1.6%を上回っており，服装学専攻の学生より付け帯の利用が多いと思われる。

帯の種類と浴衣の調製方法をクロス集計した結果を図6に示す。なお浴衣と帯の種類をそれぞれ2種類所持している学生が少数含まれていたため，それぞれに加算し整理して図は作成した。全体では手縫いの浴衣に自分で結ぶ半幅帯の組み合わせが各専攻とも37.7%，15.9%，12.6%と高率を示した。服装学専攻についてみると，手縫いの浴衣に半幅帯の組み合わせに集中しており，手縫いの浴衣に付け帯の組み合わせは4.4%，既製品の浴衣に半幅帯は3.2%のみであり，付け帯1に対して自由に結び方の変えられる半幅帯を9の割合で多くが楽しんでいる。食生活専攻及び栄養科と生活文化専攻では手縫いの浴衣に付け帯の組み合わせが5.9%と3.2%，既製品の浴衣に半幅帯が4.4%と5.9%，既製品の浴衣に付け帯が3%と3.8%みられた。わずかではあるが，服装学専攻

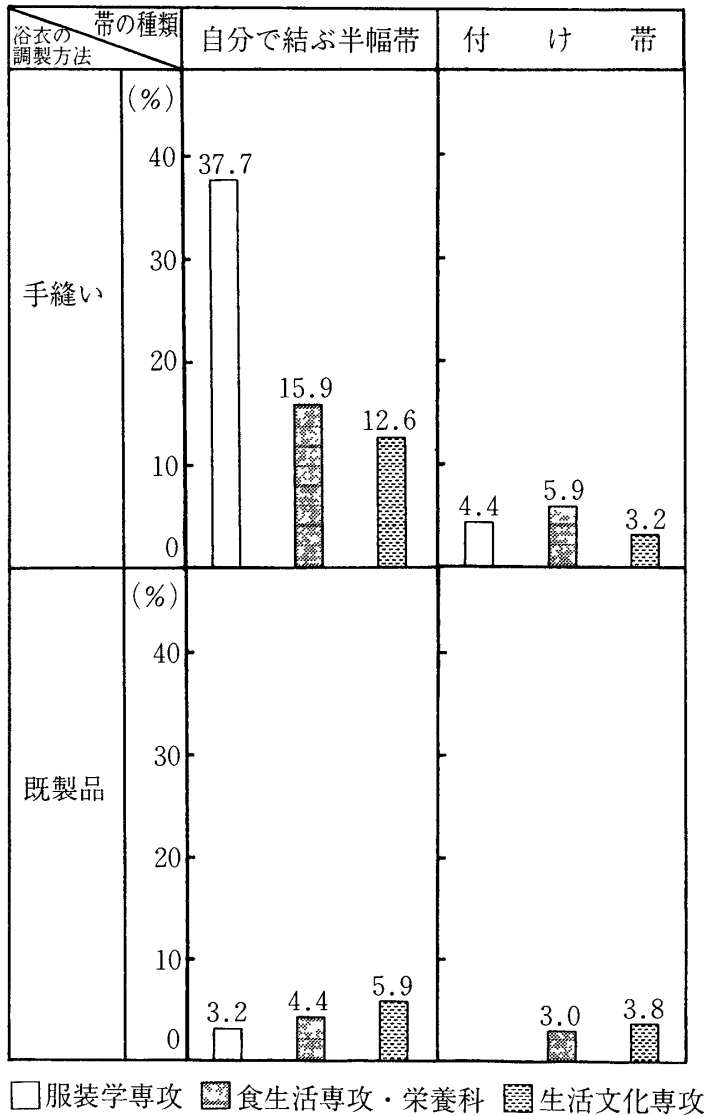


図6 帯の種類と浴衣の調製方法のクロス集計

より食生活専攻及び栄養科や生活文化専攻の学生の方に既製品の浴衣や付け帯の利用が多くみられた。

4. 付け帯の種類

次に付け帯を着用した70名に対して、付け帯の構成の形態、縫製方法、価格について検討した。専攻別の付け帯の着用者70名の内訳は服装学専攻15名、食生活専攻及び栄養科31名や生活文化専攻24名であった。服装学専攻の学生が少ないのは浴衣着用者の約90%は半幅帯を利用した為である。

付け帯の構成の形態は自分のこれまでの研究<sup>4)</sup>や市場調査の結果を図7に示すように“a, 胴と結びつけた後帯が一本つづき”, “b, 胴と結びつけた後帯”, “c, 胴と自由に結べる後帯”にまとめた。

付け帯の形態別利用の結果を図8に示す。bの“胴と結びつけた後帯に分かれた形式”が82.8%と最も高率であり、aの“胴と結びつけた後帯が一本つづきの形式”とcの“胴と自由に結べる後帯に分かれた形式”は共に8.6%であった。付け帯の形態では、呉服の専門店等で市販されている場合もbの後帯を色々なデザインに作り箱入りで販売される品を多くみかけるが、大変かさばるものである。最近では図7に示すcの胴とはねと手の三つをたたみ、約13cm×19cmの大きさに厚み3cmとコンパクトなファスナー付きビニールケースに収納できる軽便な

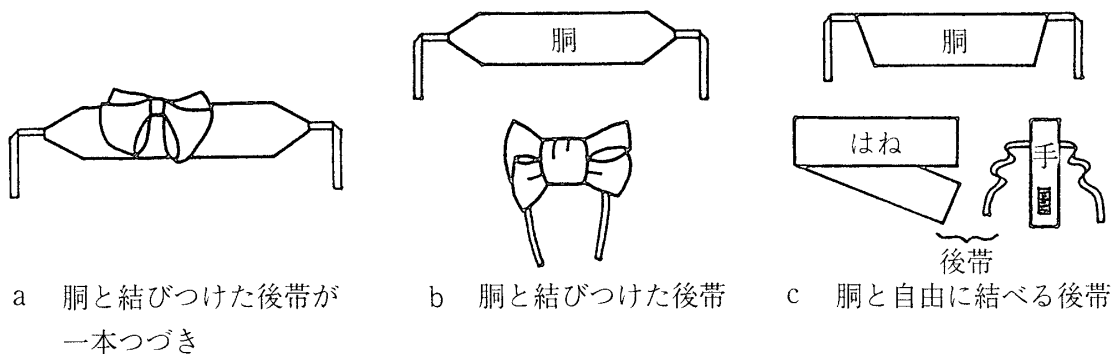


図7 付け帯の構成の種類

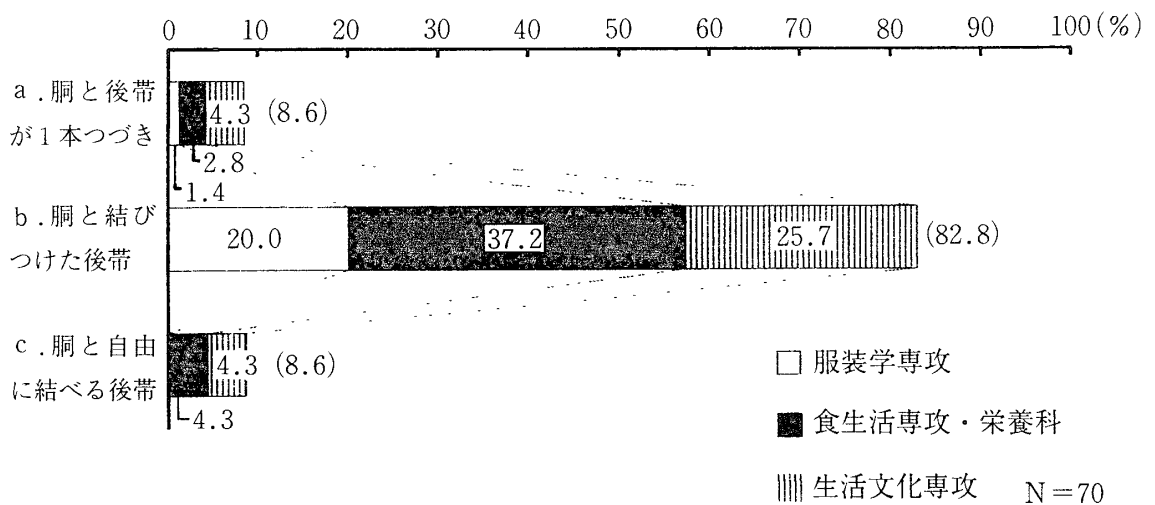


図8 付け帯の構成の形態別利用

付け帯も市販されはじめ、今回の調査でも8.6%の利用がみられた。

付け帯の縫製についての結果を図9に示す。全専攻とも既製品の付け帯が88.5%と最も多い利用があった。次いで気に入った半幅帯を購入してから付け帯に加工してもらうという注文品が8.7%、手製2.8%の順であり、付け帯の場合は既製品の利用が多い事が把握できた。

付け帯着用者のうち既製品の付け帯を利用した62名の付け帯の価格について図10に示す。3千円以下6.5%、次いで5千円以下が22.6%、1万円以下が29%で最も多く、1万5千円以下が11.3%、1万5千円以上が1.6%であった。現在市販されている既製品の付け帯の素材はほとんど化繊のものが多くみられるので、アンケートの結果のように5千円以下から1万5千円位の価格に集中しているのは妥当であろうと考える。不明が29%と高率を示したのは、アンケート用紙は集合調査法で、配布して書かせたらすぐ回収するという方法であり、不明の回答が多く出たと思われる。

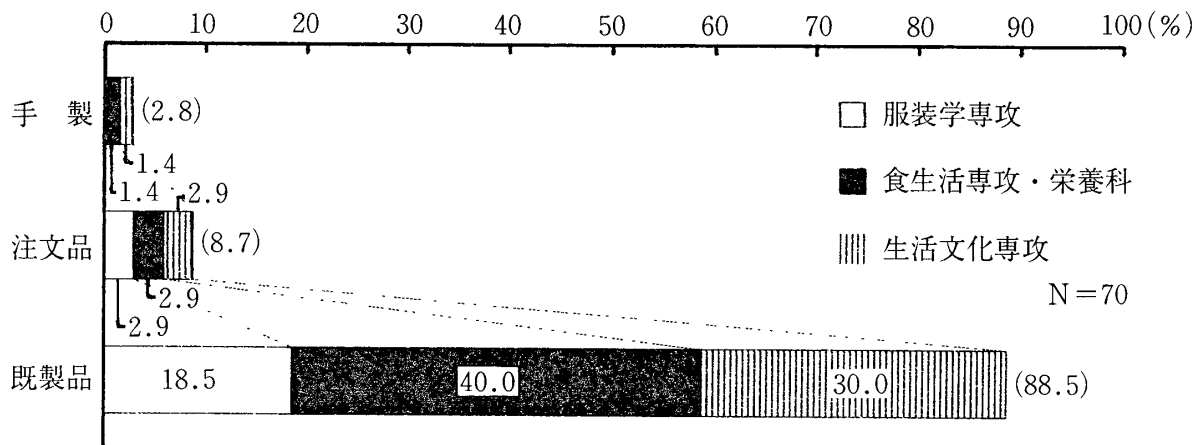


図9 付け帯の縫製

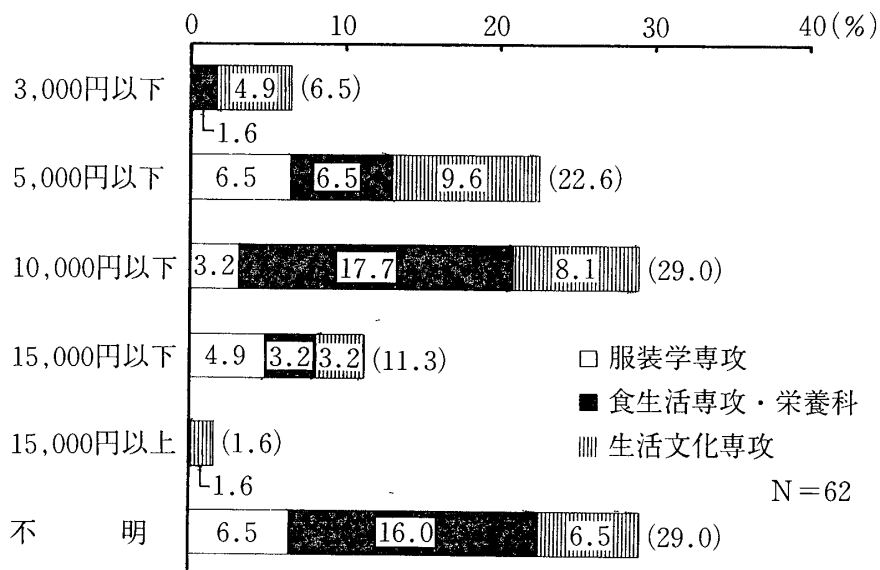


図10 既製品の付け帯の価格

## 要 約

女子大生における浴衣と帯の着装と調製方法、さらに付け帯の利用についての実態を探ることを目的としてアンケート調査を行い名古屋女子大学短期大学部の服装学専攻、食生活専攻及び栄養科や生活文化専攻750名の学生を比較、さらに専攻、コースの特色を比較するために服装文化コース160名、食生活専攻190名、情報秘書コース187名のグループをとり上げて比較検討した結果、次のことが把握できた。

1. 浴衣の着用状況では、浴衣を着用した学生は全体で約43%と半数近くみられた。専攻及びコース別では服装文化コース69.4%、食生活専攻41.1%、情報秘書コース35.3%で服装文化コースは高率を示した。浴衣の着用回数は1回が64%、2回が25.5%であり、3回以上の着用も11.4%みられ、夏のきものファッションを楽しんでいる状況がうかがえる。
2. 着用した浴衣の調製方法では、全体で“手縫い”が約79%と多く、“既製品”が約19%であった。“手縫い”の場合の縫製者は、本人が約43%、呉服屋にたのんだ場合が約25%、家族の人が約21%、その他の知人にたのんだりしたが約11%の順であった。専攻及びコース別では、“手縫い”の縫製者の本人の約53%のうち授業で浴衣の製作をしている服装文化コースの学生が95%と高率を占めており、食生活専攻には5%みられた。
3. 浴衣に着用した帯の種類では、自分で結ぶ半幅帯が約79%、付け帯の利用が18%みられた。付け帯の利用者を専攻別にみると、食生活専攻及び栄養科の学生が50%と多く、生活文化専攻の学生が41%、服装文化専攻の学生は9%と少なく、授業での着装実習を生かして自分で結ぶ半幅帯の利用が多くみられた。
4. 帯の種類と浴衣の調製方法の組み合わせでは、手縫いの浴衣に半幅帯の組み合わせが約7割と最も多く、次いで既製品の浴衣に半幅帯の組み合わせや手縫いの浴衣に付け帯の組み合わせ、既製品の浴衣に付け帯の組み合わせの順にみられた。専攻別にみると、服装学専攻では手縫いの浴衣に半幅帯の組み合わせに集中しているが、食生活専攻及び栄養科や生活文化専攻においては、手縫いの浴衣に付け帯、既製品の浴衣に半幅帯や付け帯の組み合わせにも分散してみられ、服装学専攻より既製品の浴衣や付け帯の利用が多かった。
5. 付け帯の構成の形態別利用では、“胴と結びつけた後帯に分かれた形式”が最も多く82.8%であった。“胴に結びつけた後帯が一本つづきの形式”と、“胴と自由に結べる後帯とに分かれた形式”は共に8.6%と少ない利用であった。
6. 付け帯の縫製では既製品が88.5%と最も多かった。既製品の付け帯の価格は5千円から1万円が最も多く29%、次に3千円から5千円が22.6%、1万円から1万5千円11.3%の順にみられた。

以上の結果、女子大生における浴衣の着用状況、既製品の浴衣や付け帯の構成の形態と利用度も把握できた。今後さらに市場の動向も探り、被服教育への検討を深めたい。

## 参 考 文 献

- 1) 日本繊維新聞社：きものビジネス，秋冬号，27～30（1992）
- 2) きもの研究，10月22日，日本繊維新聞（1993）
- 3) 日本繊維新聞社：きものビジネス，夏号，70～73（1993）
- 4) 豊田幸子，安藤たか子：日本服飾学会誌，11，183～190（1992）
- 5) 染織新報社：そめとおろし，2月号，57～64（1993）